

してはクエン酸刺激を併用した ^{99m}Tc シンチが診断に有用であった。また ^{99m}Tc シンチは腫瘍の性状や正常実質の残存をみるのに有用で、 ^{67}Ga シンチを組み合わせることによりかなり良悪性を鑑別することができた。

5. 頭頸部領域における ^{67}Ga -citrate SPECTの有用性

谷 淳至 中別府良昭 土持 進作
中條 政敬 (鹿児島大・放)

今回われわれは、頭頸部病変が疑われた17例で ^{67}Ga -citrate (Ga)による全身の前後像に加えて頭頸部SPECTを撮像し、両者の比較を行った。そのうち13例は、理学的検査などにより頭頸部病変の存在が確認されていた。明らかな異常集積を認めたもの(+), 認めないもの(-), 判定困難なもの(±)を視覚的に評価した。病変存在が確認されていた13例では全身像で(+)5, (-)3, (±)5例, SPECTで(+)10, (-)3, (±)0例であった。(+)を陽性とした場合の感度は全身像では38.5%, SPECTでは76.9%であった。病変存在が確認されていなかった4例では、いずれにおいても異常集積を認めなかった。Ga-SPECTは、頭頸部領域の評価に有用であると考えられた。

6. ^{123}I -IMP 脳血流シンチにて経過観察した副腎白質ジストロフィの1例

福島 健自 陣之内正史 長町 茂樹
中原 浩 Leo G. Flores II
渡邊克司 (宮崎医大・放)

症例は7歳男児。1993年4月より、視力障害、行動異常出現。神経内科にて副腎白質ジストロフィと診断された。受診時の ^{123}I -IMP SPECTでは、両側後頭葉、頭頂葉および側頭葉に広範囲の血流低下を認めた。同時期に施行されたMRI-T2強調像では後頭葉および側頭葉の白質に広範囲の高信号域が認められた。半年後、けいれん発作が頻回に出現するようになり、再度の、脳血流シンチおよびMRIによる評価を行った。MRI上は病変が前方に拡大していたのみであったが、脳血流シンチでは、当初低血流を示した後頭葉、頭頂葉および側頭葉に一致して高血流域を認めた。病態により脳血流の増減していることが

捉えられた。

副腎白質ジストロフィは病理学的には後頭葉および側頭葉の脱髄が主で、臨床的には進行性に精神運動機能の衰退、痙攣状態が増悪し、徐皮質状態となる疾患であるが、脳血流シンチは本疾患の病態把握に有用と思われた。

7. ^{201}Tl SPECTが有用であった隣接した多発頭部腫瘍の1例

吉開 友則 松本 幸一 加藤 明
内野 晃 工藤 祥 (佐賀医大・放)
下川 尚子 中島 進 田淵 和雄
(同・脳外)

症例は66歳の女性、主訴は右眼球突出。約10年前から右視力障害が出現し緩徐に進行した。平成7年6月右眼痛を覚え某病院眼科を受診。CTにて前頭部腫瘍を指摘されて当院脳外科を紹介された。CTでは眼窩上壁から前頭骨の一部を破壊する右前頭部の腫瘍と右側傍鞍部の腫瘍が一塊として描出され、造影剤にて共に強く増強された。MRIでは2つの腫瘍は信号強度の違いにより区別された。 ^{201}Tl SPECTの早期像で2つの腫瘍には共に高集積がみられたが、後期像では前頭部の腫瘍は高集積が持続し、傍鞍部の腫瘍は集積が低下していた。手術の結果、前者は悪性線維性組織球腫、後者は髄膜腫であった。異なった ^{201}Tl 動態が2つの頭部腫瘍の鑑別に有用であったので報告した。

8. 婦人科悪性疾患術後症例における下肢RI venographyの臨床的意義

勝山 直文 堀川 歩 大城 康二
吉長 正富 奥間 裕二 高良 誠
中野 政雄 (琉球大・放)

今回、婦人科悪性疾患術後症例を対象に下肢RI venographyの方法および読影基準を検討したので報告する。対象は子宮頸癌35例、子宮体癌4例、卵巣癌2例、その他2例の計43例である。 ^{99m}Tc -MAAを足背静脈より一定速度にて静注し、全身モードとスポットでの動態撮影の2種類を撮像した。正常ボランティア5例についても検討した。診断基準とその程度を決定するための所見として、1) 深部静脈の閉塞ま

たは狭窄、2) 側副路の発達、3) 静脈内 RI 停留、4) 表在静脈の描出について検討した。1)、2) の所見がそろえば DVT と診断可能だが、それ以外の所見は正常ボランティアでも認められることがあり、あまり特異的な所見ではなかった。

9. 小児アランチウス静脈管開存症の診断および治療効果判定における ^{123}I -IMP 経直腸門脈シンチの有用性

吉良 朋広 富口 静二 吉良 光子
 大山 洋一 高橋 睦正 (熊本大・放)
 池田 信二 内野信一郎 (同・小児外)

目的：アランチウス静脈管開存症は小児でまれに認められる疾患である。その診断は超音波にて静脈管の開存を確認すれば可能であるが、短絡の程度について知る方法はいまだ確立されていない。今回われわれはアランチウス静脈管開存症の3例を経験したので、これに正常と考えられた3症例を加え報告する。

対象および方法：対象は1995年1月から12月まで熊本大学放射線科にて門脈大静脈シャントが疑われ ^{123}I -IMP 経直腸門脈シンチを施行した3例。年齢1-5歳(平均3.0歳)、男性2例、女性1例、全例アランチウス静脈管開存症であった。正常対照3例は全例男性、年齢0-5歳(平均2.0歳)。装置は東芝製ガンマカメラ GMS7200 である。方法は ^{123}I -IMP 37 MBq を経直腸的に投与し前面像にて1フレーム1分間で30分間のダイナミックデータを収集した。投与後25から30分の 512×512 マトリックスの5分間の static 画像データを用い、肝と肺の関心領域のカウントを縦隔をバックグラウンドとして補正し、シャント率 = 補正後肺カウント / (補正後肺カウント + 補正後肝カウント) でシャント率を算出した。また手術の行われた3例については術後にも検査を行った。

結果：アランチウス静脈管開存症の3例はいずれも50%以上のシャント率(平均65.1%)を認めた。アランチウス静脈管開存のない3例のシャント率は平均 $6.3 \pm 1.9\%$ であった。手術を施行した3例については症例1は手術後シャント率7.3%に低下し、症例2は4.1%、症例3は22.7%に低下した。

結論： ^{123}I -IMP 経直腸門脈シンチはアランチウス静脈管開存症の診断および治療効果判定に有用であっ

た。 ^{123}I -IMP 経直腸門脈シンチは侵襲が少なく本症のような小児の門脈大循環短絡の評価に有用と思われる。

10. 無痛性甲状腺炎における甲状腺シンチグラフィについて

桂木 誠 筒井 竹人 荒木 昭輝
 船津 和宏 木村 史郎 清水健太郎
 境 文孝 西原 春實
 (聖マリア病院・画像診断部)
 布井 清秀 (同・糖尿病内)

無痛性甲状腺炎4例のシンチグラフィについて報告する。1例は出産後である。いずれも甲状腺機能亢進の症状を有し、血中のホルモンレベルが上昇していたため、甲状腺機能亢進症との鑑別が問題となった例である。

^{123}I NaI による甲状腺シンチグラフィではヨードの摂取が著明に低下していた。機能亢進の症状は甲状腺から血中への一過性ホルモン逸脱によるものと考えられた。真のバセドウ病と炎症による機能亢進との鑑別に甲状腺シンチグラフィは有用であると思われる。

11. 副腎癌による原発性アルドステロン症の一例

小林 正和 土持 進作 谷 淳至
 中別府良昭 中條 政敬 (鹿児島大・放)

副腎癌による原発性アルドステロン症の稀な一例を報告した。症例は39歳、男性。人間ドックにて右副腎腫瘍を指摘され精査目的で当科入院となった。高血圧、血漿アルドステロン値の上昇と血中レニン活性の低下を認めたが、その他のホルモン値は正常範囲内であった。CT、超音波、MRI ではこの腫瘍は 10×7 cm 大で内部に壊死巣を有していた。副腎皮質シンチでは右副腎腫瘍は欠損像を呈し、左副腎は描出された。右副腎動脈造影で腫瘍血管の増生と tumor stain を認め、静脈血サンプリングでは右副腎静脈は対側に比しアルドステロン値が高値を示した。以上より副腎癌を疑ったが、手術による摘出標本の組織診断でも副腎皮質癌であった。術後血漿アルドステロン値は正常化した。